



# 教職課程だより

## CONTENTS

1 日々の教育から感じる言語活動の重要性 システム理工学部 数理科学科 教職支援室長 石渡哲哉	6-7 教員採用試験合格体験記 工学部 情報工学科 八嶋ひより 工学部 応用化学科 中島梨胡 システム理工学部 数理科学科 東海林駿 システム理工学部 生命科学科 林 奏映 システム理工学部 機械制御システム学科 津野巧実
2 教職を目指す上で覚えておいて欲しい言葉 就職・キャリア支援部 キャリアサポート 課長 齋藤恵介	8 第10回「教職課程同窓生の集い」を終えて システム理工学部 数理科学科/教職支援室 田中友佳子 工学部 土木工学科/教職支援室 牧下英世
3 介護等体験記 システム理工学部 生命科学科 小川美咲 システム理工学部 数理科学科 梶原達也	編集後記
4-5 教育実習体験記 工学部 電気工学科 古谷 晶 工学部 応用化学科 宮越郁織 システム理工学部 数理科学科 本木 良 システム理工学部 生命科学科 神田奈那	

## 日々の教育から感じる言語活動の重要性

システム理工学部 数理科学科 教職支援室長 石渡哲哉

教職支援室長の石渡です。私自身は教職担当の教員ではないので、教職課程そのものにつわるお話ではなく、大学教員として教育をしながら考えてきたことを書きたいと思っています。

学生に何を身につけてほしいか、と考えたとき、個々の学問領域のことを深く理解し身につけてほしいということももちろんありますが、まず第一に「相手に伝わる説明文を書けるようになること」があります。このことを認識したのは、私が大学教員になって研究室学生の指導をするようになったころに遡ります。教員になると、学生の作成する様々な文章に目を通すことになります。その中には、誤字脱字といったミスだけでなく、本人の頭の中にはあったであろう文言が抜けていると思われるものや、内容が整理されていないものなどがあります。文章がうまく書けない理由としては、その内容の理解が足りていないということもありますが、それとは別に、相手に伝わるように、と意識して文章を書くこと自体の練習不足、ということも大きいと考えています。自分自身を振り返って考えてみてもそうですが、大学に入学するまで、読み手に伝わるように、と明確に意識して何かを説明する文章を書く、という機会はそう多くありませんでした。更に、例えばレポートを先生に添削してもらい推敲を重ねる、といったような文章作成のトレーニングをする

場面はほぼありませんでした。私自身の経験では、研究室に入ってからそのような経験が増えていったと思います。なお、文章化の効能として、対象や考えていることなどを文章化することで思考や情報が整理されることが期待できますし、こういった言語能力の向上は、人との議論や情報共有がより円滑になることも期待できます。このような相乗効果も期待しつつ、芝浦に来てからは4年次以降となる研究室内だけでなく、1年生プログラミング系の科目でグループワークとして文章作成を取り入れました。現在は数理科学科の1年生から3年生の各学年の担当科目で、半期で3回グループでのレポート作成とその相互評価を行ない、同世代の評価者に読まれることを想定した文章作成をさせています。文章作成の練習量が劇的に増えているわけではないですが、1回目より3回目の方がかなり読みやすく整理された文章になっていると感じています。

改訂された学習指導要領でも言語活動の重要性が盛り込まれていますので、今後学校現場でもより対話的活動や文章作成の機会が増えると思います。教職を目指すみなさんは、各教科の内容を教えるという観点だけでなく、どのようにしたら生徒たちの言語能力が向上するのか考えてこれからの教育を創ってほしいと思います。がんばってください。

# 教職を目指す上で 覚えておいて欲しい言葉

就職・キャリア支援部  
キャリアサポート課長

齋藤 恵介

『働く意味』の答えを見い出せぬまま就職活動を進め、社会に出ていく若者が少なからずいる中で、皆さんは教師という仕事を職業に選ぼうとしている。生徒が生き甲斐を探す支援をすることが教師の生き甲斐であり、生徒の自己実現を通じ、自らの自己実現することこそ教師の『働く意味』と考える。皆さんにとって、この意味を実現するという明確な目標を持たたこと自体、大いに意義深いことであることをまずはお伝えしておきたい。学級崩壊や虐め、不登校等、生徒指導の難しさが増す昨今、教師になるという決断は簡単なことではないが、一方でこの職業は生徒と本気でぶつかり、共に成長していける『聖職』とも言える。そこで、教育ならぬ『共育』を通じて互いに成長していく為に、皆さんに2つの言葉を送りたい。まず、教師は真白な生徒達を染めていく最初の人であり、生徒達のロールモデルとして彼らの人生に大きな影響を及ぼす立場である。そして生徒を一人の人間として認め、同じ目線に立ち、全身で彼らの思いを受け止める覚悟も必要である。様々な個性を持つ生徒に一律の対応をするのではなく、百人の生徒には百通りの向き合い方があるはず。そこで、生徒と向き合う上で以下の『かきくけこ』を意識し実践してみて欲しい。◆か(感謝する)◆き(期待する)◆く(思いを汲む)◆け(激励する)◆こ(声を掛ける)。生徒第一に奮闘し、生徒一人一人と真剣に向き合える先生がいることが、クラスを学校を大切にすることに繋がり、生徒間のトラブルや虐めが無い、温かい団結したクラスになると信じてやまない。そして、異業種との関わりが少ない世界で生きる中で、大学卒業直後から先生と呼ばれ、尊大に振舞ってしまう場面や、生徒と本気で向き合う中で壁にぶつかり、自分に負けそうになる場面もあるかも知れない。そんな時はこの『青い熊』を思い出して欲しい。◆指導して上手いかぬとも『あ』せるな◆思い通りにならなくとも『お』こるな◆偉そうに『い』ばるな◆どんな状況でも『く』さらず我慢強くあれ◆諦めそうになる自分に『ま』けるな！常に、この『かきくけこ』・『青い熊』を念頭に生徒と向き合い、共に成長し続けて欲しいと心より期待している。

# 介護等体験記

特別支援  
学校

システム理工学部 生命科学科 小川美咲

私は2日間、埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園で介護等体験を行いました。

埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園は、聴覚に障害がある幼児・児童・生徒のための特別支援学校です。以前は、視覚障害教育を行う盲学校、聴覚障害教育を行う聾学校、肢体不自由や知的障害等の児童・生徒のための教育を行う養護学校に分かれていましたが、現在はいずれの学校も特別支援学校と呼ばれています。私は聾学校について言葉しか聞いたことがなく、実際にその学校に通う学生がどのような生活を送っているか、全く知りませんでした。ガイダンスでは、学校の概要や注意点だけでなく、基本的な手話を教わる時間がありました。耳が聞こえない人と言葉を使わず、どのようにしてコミュニケーションが取れるのか、心配と緊張で私の心は埋め尽くされていました。

2日間、高校3年生の見学をさせていただいたのですが、学生、教員の方々が積極的に話しかけて下さり、最初にあった心配と緊張はいつの間になくなりました。しかし、学生と教員は手話を用いて会話するのですが、そのときは手だけでなく口の形も重要で、学生は手話+口、教員は手話+口+声で会話していました。私は教員の言っている言葉はわかるのですが、学生の話していることは分からないので非常にもどかしい気持ちになりました。その日をきっかけに手話を学んでコミュニケーションをとりたいという気持ちが芽生え、現在でも動画やインターネットで手話について学んでいます。

社会、数学、化学、体育、美術、調理実習の見学を2日間でさせていただきましたが、社会と数学、美術、体育は私たちも経験したことがあるような内容で、大きな違いがあったのは化学、調理実習でした。生活デザイン科の見学であったこともあり、化学の時間では農作物の利益予想・スケジュール作成を行い、調理実習では資格取得に向けてオードブルを作っていました。共通しているのはどの学生も生き生きと、手話を用いて教員と交流を取りながら楽しそうに学んでいました。

「耳の聞こえない人」と「私」の間には大きな壁があるのではないかと初めは思っていたのですが、この体験を通じて、実際は勝手に作り上げた偏見に過ぎないことに気が付きました。耳が聞こえないというだけで、私たちと何も変わりませんでした。また、体験を通して教員の方がICT技術を用いて授業を工夫している場面を多く見ました。手話の勉強も教員になってからだそうで、この体験で教員の大変さと偉大さを感じ、学びになりました。2日間という短い間ですが、狭かった視野を広げ、人として成長できる貴重且つ充実した時間でした。

社会福祉  
施設

システム理工学部 数理科学科 梶原達也

私は埼玉県の児童養護施設で、5日間、10:00~16:00の時間帯で介護体験を行いました。体験の2か月前には、施設の簡単なガイダンスがあり、施設の紹介や注意事項について説明を受けました。体験が始まる日は非常に緊張していましたが、偶然にも祝日で学校が休みだったため、元気な子どもたちが挨拶してくれ、緊張が和らぎました。

初日の午前中は生活スペースに行き交流が中心となりました。私は児童養護施設についてほとんど知識がなかったため、みんなで任天堂Switchを使ってゲームを楽しんだり、スマートホンを使ったりしている子どもの姿を見て、驚きました。自分の中ではゲームやスマートホンの使用ができないというイメージがありましたが、実際はそうではありませんでした。挨拶の後は一緒にゲームを楽しんだり、3人ほど抱えて歩き回ったりしました。

午後は、ホールと呼ばれる体育館に近い施設でドッジボールをして遊びました。大きな問題はなく、楽しく過ごせましたが、ボールを過剰に奪い合う子もいて、時折注意を払いました。私は施設の子どもたちは兄弟のような感覚かと思っていましたが、ここでは友達という感覚がかなり強いようでした。

二日目から五日目は平日であり、初日のような活動はほとんどなく、主に掃除や洗い物などの環境整備が中心となりました。最初に想像していた体験の業務とは異なる内容でしたが、施設の職員から子どもたちの日常を守る重要な業務であると伝えられ、気持ちを込めて取り組みました。

体験を終えて、私の中でイメージが大きく変わりました。体験前には児童養護施設は厳しく、自由が少ない環境でゲームやスマートホンの使用ができないという印象がありましたが、実際には1~2人の個室やゲームやスマートホンの使用が可能で、子どもたちにとって不自由のない生活が施設の職員や関係者の尽力によって保障されていました。職員の方々の全員が子どもたちのことを深く考えているということを感じました。もちろん施設によって異なると思いますが、将来教育に携わる人々はこれらの事実を知っておくべきだと考えます。五日間の体験を通して、様々な状態の児童がいることを知り、人間として成長することが出来たと思います。





# 教育実習体験記



## 公立高校・数学

工学部 電気工学科 古谷 晶

私は3週間、母校の公立高校で実習を行いました。実習校では、生徒にタブレット端末が配布され、授業や部活動などの場面で活用する様子が見られました。授業ではPowerPointによる資料やデジタル教科書が活用され、視覚的に理解しやすくする工夫が行われていました。

1週目は積極的に生徒とのコミュニケーションを取ることを意識しました。学校行事の話題は盛り上がりやすく、実習中は体育祭の話題で様々な生徒との距離を縮めました。このときに築いた人間関係は授業に良い影響をもたらしました。授業中の発問に対して、生徒が積極的に反応する場面が以前より多く見られるようになり、私自身は落ち着いて授業実習を行うことができました。この体験から、日常的に生徒とコミュニケーションを取り、信頼関係を築いておくことの大切さを学びました。

授業実習は1年生の数学、確率と2次関数の2分野を担当しました。この2分野は説明する時間よりも生徒に考えさせる時間を多く作ることが重要でした。しかし、授業では、説明の時間が多くなってしまい、生徒に考えさせる時間が短くなってしまいました。授業後の振り返りでは、先生の説明は具体例を1つ示すのみにし、残りの内容は演習で生徒自身に気付かせると説明する内容を短くできるなどのアドバイスを受けました。このアドバイスを参考に授業の改善を行い、例題はいくつか抜粋して説明し、類題や応用問題はグループで解かせることで、生徒に考えさせる時間を多く作るようにしました。生徒の理解が不十分な部分は、問題の解答解説や机間指導で対応したり、机間指導中に生徒同士で教え合うように促したりしました。その結果、生徒の活動が活発になり、振り返りでは指導教員から生徒の理解度が良かったと評価をいただきました。

教育実習は常に忙しく、予想外の出来事も多くありましたが、様々な発見や学びがありました。最終日には、生徒達から「2次関数が分かった」や「授業が面白かった」などの反応が得られ、教えることの面白さを学ぶことができました。この3週間で得られた学びを今後に活かし、人としてさらに成長していきたいと思えます。



## 公立中学・理科

工学部 応用化学科 宮越郁織

私は3週間、母校の公立中学校で教育実習をさせていただきました。担当クラスは中学3年生を持ち、理科を担当しました。教育実習を通して学んだことの中で特に印象に残っているのは2つあります。

1つ目は授業計画の重要性です。私は実習3日目から教壇に立ちました。初回の授業は教材作成に時間を割きすぎてしまい、いつもより授業計画を練ることができずに臨みました。大学での学生相手の模擬授業とは異なるため、生徒の反応やペースを分かっておらず、初回授業は授業時間内に終わらされたものの反省点が残る出来でした。それ以降は生徒のリアクションや躓きそうなポイント、時間をかけて理解を促したいところ、実験での説明や指示の出し方等の“生徒”を意識した授業計画や準備をして全力で授業に臨みました。当然ながら授業計画のようなシナリオ通りに授業が進行するわけではありません。しかし、計画を立てることによって時間を調整したり、授業を切りがいいところで終えさせられたり、何より教員が自信をもって教えられたりします。より良い授業の運営には授業計画が不可欠であることを学びました。

2つ目は主体的な授業づくりの難しさです。教育実習の初週に様々な先生方からお話を伺う機会があります。その際に校長先生が話された内容で最も印象に残っているのが主体的な授業についてです。教科書の内容を一方向的にただ教えるのではなく、教員と生徒のコミュニケーションの中で生徒に考えさせて学習を自分のものにさせる授業になるよう努めました。授業では質問や課題を考える時間を与えた後に生徒に答えてもらったり、生徒から何気なく出てきたキーワードを意識して拾って反応したりすることで、生徒が受け身にならない授業展開を心がけました。これらのことは授業の回数を重ねるごとにできるようになっていきましたが、力が不十分でした。主体的な授業の展開は難しいことを痛感しました。

教育実習を通して、授業を含む学校生活において教員と生徒のコミュニケーションや信頼関係の大切さを学びました。教育実習は生徒と関わり合い、共に学び、成長する貴重な機会です。悔いのないよう、楽しみながら全力で駆け抜けてください。





## 私立高校・数学

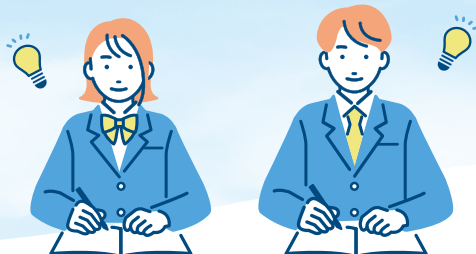
システム理工学部 数理科学科 本木 良

私は母校である私立高校で3週間、教育実習を行いました。担当教科は数学で、第2学年理系クラスに配属されました。

実習1週目は先生方の講話と実習生同士による模擬授業がありました。講話では、校長先生をはじめ多くの先生から、教師としての振る舞いや、生徒指導、教科指導、進路指導など教師の一日の基本的な勤務をする上で重要なことを教えていただきました。特に、教科指導に非常に力を入れており、「教科書で教える」とどの先生もおっしゃっていて、自分が持っている100%の専門教科の知識のなかから、「何を教えて何を教えないか」ということを考えるよう、助言をいただきました。模擬授業では、空き時間に準備を重ね、万全の状態で行き詰りではありましたが、なかなかうまくいかず、先が思いやられるようでした。

2週目からは授業見学や授業実習を並行して行っていました。見学は教科を問わず、目的を決め、それに沿って観察し、質問にも行くようにしました。当時お世話になった先生方もまだまだたくさんいらしたので、積極的に見にいきました。授業実習では、事前に指導教諭に板書計画や進め方を予め共有し、授業に臨みました。授業をしていくうえで、生徒たちの理解度の差を改めて感じ、言葉や説明の使い分けが難しかったです。授業後の指導教諭からのフィードバックでは、うまくいったことも、できなかったことも言い訳をせず両方報告し、指導方法や生徒たちへの対応について助言を受けました。また、自分の知識を過信して、間違えたことを教えてしまったときには、きちんと説明をするべきだと感じました。そして、放課後には、実習生同士で自主的に集まり、模擬授業を行って客観的な視点を持つようにしました。自分では100%準備したつもりでも、実際にやってみると全然進まなかったり長々と説明してしまったりしたので生徒たちの前で授業するときには気を付けるべきことがしっかり見えました。

教育実習では、私が生徒だった当時では考えられないくらいの準備を先生方が行っていたことに気づきました。教員として学校に勤務することになったときには、より生徒のための学校づくりに貢献していきたいと強く思います。



## 公立中学・理科

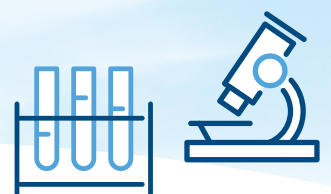
システム理工学部 生命科学科 神田奈那

私は埼玉県公立中学校で3週間実習を行いました。1年生の6クラスの授業を担当し、ガスバーナーの使い方や無機物、有機物など化学分野の実験を行うことになりました。また、道徳の授業も行いました。

1週目は授業見学を行い、担当教員の理科の授業だけでなく、他の学年の理科の授業や道徳の授業なども見学し授業方法を学びました。2週目からは実際に授業を行い、朝、放課後のホームルームも担当しました。全授業のうち半分以上が実験の授業であり、生徒が怪我なく安全に実験できるか、授業時間内に片付けまで終わらせられるか不安でした。最初は緊張から実験方法や注意点を十分に説明できていなかったり、指示がうまくできなかったりしたため、授業を円滑に進められないことがありました。ここで、指導教員から授業毎にアドバイスを頂き、改善を重ねることで、次第に落ち着いて丁寧に授業ができるようになったのを感じました。また、2週目には体育祭があったため、お昼や放課後の体育祭練習にも参加し生徒と交流を深めることが出来ました。

授業を行う中で最も大切だと感じたことは、実験でなぜこのような結果が得られたのかという理由を生徒自身で考察させることです。既習内容を踏まえて班で考え、クラス全体で意見を共有することで前回の内容の復習ができるだけでなく、新たな視点から物事を考えられるようになり、学びを深めることができると思いました。一方、通常の授業では生徒の意見一つ一つを拾い、全ての生徒が授業に参加しているという意識を持たせることが大切だと思いました。一方的に教え込むのではなく、双方向のコミュニケーションをとることが知識の定着に必要であると思いました。

実習を通して、教員は授業や部活で多忙でありながらも、生徒との関わりから得られる喜びも多い、魅力的な仕事であると感じました。大学の授業で学べることはほんの一部で、実習でしか得られないことも多いと思いました。非常に短い期間の中で、毎日新たな発見があり、目標を立てて行動することで自身の成長に繋げることが出来たと思います。実習は毎日が本番であるため、悔いのないよう、自主的に行動し、楽しんで欲しいと思います。





# 教員採用試験 合格体験記

## 公立・高校情報

### 工学部 情報工学科 八嶋ひより

私は今年、宮城県の高校情報の教員採用試験を一般受験し、合格することができました。私が合格するまでに取り組んだこととお話します。

私は、3年生の冬に教員を目指すことを決めたため、それから採用試験の勉強を始めました。宮城県の試験内容は1次試験で教職・一般教養、専門教養の2つの筆記試験、2次試験は集団討論と個人面接がありました。

まず1次試験についてです。教職・一般教養は教員を目指すよう決めた3年生の冬から勉強を始めました。これは、教職教養の授業を1,2年次に多く受けており覚えていないことが多かったためです。また、一般教養については範囲がとても広いため早めに始めることをお勧めします。具体的には2月まで参考書で学習し、3月から過去問を主体にしました。専門教養については、過去問中心の勉強のみ行いました。専門教養の過去問を12月に解いたところその時点である程度点数が取れていたため、2月から過去問を解きながら、苦手な部分のみ重点的に勉強しました。

来年からは試験日が早くなる地域もあるらしいのでわかりませんが、私の話をすると、7月に1次試験がありました。その直前期は教育実習や卒研で忙しく試験範囲がとても広いので、試験日まで長期的な計画と短期的な目標を立てて勉強を行いました。皆さんも自分のスタイルを確立して勉強すると良いと思います。

次に、2次試験です。2次試験は、個人面接と集団討論でした。個人面接では、準備していた質問以外に場面指導などその場で考えて答える質問がいくつかあり、その際は一貫性のある回答を意識しました。集団討論は、周りの意見を聞きながら自分の意見を話すため、周りが話しているときは身体を向けて反応しながら聞くこと、流れを受けながら意見を述べることを意識していました。どちらも慣れがかなり大切なので、出来る限り練習をすることをお勧めします。また、教員になりたいという強い気持ちが一番大切だと思うので、将来の自分の姿をイメージして話すこと良いと思います。

最後に、教職課程の先生方には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。これからも日々生徒とともに成長できる教員を目指していきたいと思っています。

## 公立・高校理科

### 工学部 応用化学科 中島梨胡

私は今年、埼玉県高校理科の教員採用試験を一般受験し、合格することができました。ここでは、私が合格するまでに取り組んだこととお話します。

まず、教育に関するボランティア活動に取り組むことです。私は、埼玉県が募集していたスチューデントサポーターと、大学主催のファシリテーターのボランティア活動を行いました。どちらの活動でも、新たな発見や気づきを多く得ることができ、ここで得た経験は2次試験の面接や集団討論の際に非常に役に立ちました。

次に、一次試験についてです。埼玉県では、一般教養と教職教養、専門科目の2つの試験が行われます。初めに、自分が志望する自治体の過去問を解くことから始めました。そうすることで自分の実力を知り、さらに、問題の傾向も分析でき、特に勉強すべき範囲を明確にすることができます。一般教養では、幅広い科目の問題が出題されますが、難しい問題ではなくほぼ基本的な問題が出題されます。他にも時事問題が出題されるので、日頃から新聞などを読むことで日常のニュースを知っておくことも重要です。高校理科の専門科目では、物理・化学・生物・地学の発展までが専門科目として出題されます。私は生物と地学は高校生の時に学んでいなかったため、なるべく早めに取り組みました。また、4科目あると、偏ってしまうので計画立てて取り組むことが重要だと思います。

次に二次試験では、個人面接、集団面接、集団討論、小論文がありました。面接と討論に関しては、想定問答を作成することが非常に重要です。志望理由などの基本的なものから、様々な悩みを抱えた生徒への対応の仕方など、ボランティア活動や教育実習を通して得た経験を混ぜながら考えると良いと思います。小論文は、キャリアサポート課を利用して対策を行いました。小論文を書くことに慣れるためにも、3年生の段階から練習しておくこと本番前には余裕が生まれるはずですが、どの試験科目も、何回も対策を行って自信をつけることも重要になるので、なるべく早めに取り組んでください。

教職課程の先生方をはじめ、多くの方に支えられて合格することができました。4月からは教員として、学ぶ姿勢を忘れずに頑張ります。

## 公立・高校数学

### システム理工学部 数理科学科 東海林駿

私は2023年に山形県の高校数学の教員採用試験を一般受験し、合格することができました。ここでは私が合格までに取り組んだことについてお話します。

まず一次試験では、教職教養、一般教養、専門教養の試験がありました。私は複数の自治体を受験しましたが、自治体によっては一般教養がなく、配点に関しても大きく異なります。そのため、最初に過去問を解いて、その自治体の傾向を把握すると共に、情報収集をしっかりと行い、合格までの計画を立てることをお勧めします。一般教養は、範囲が広いので、苦手意識のある科目や教

科を早いうちに学習しておくことが求められます。例えば、埼玉県の問題では音楽や芸術についての問題があり、今まで学習したことがない内容だったので、大変苦労しました。教職教養は、特に教育法規と新学習指導要領などの頻出事項に力を入れて暗記を行い、間違った問題を自分のノートにまとめました。専門科目は、苦手分野及び、新課程における「統計的な推測」に関する学習を行い、安定して合格点が取れるようになるまで勉強しました。

次に二次試験では、個人面接と作文の試験がありました。個人面接では、過去問や頻出問題に加えて、「第四期教育振興基本計画」や生成AIなどの近年他の自治体で聞かれた問題を収集し、一度すべての問題について自分なりの解答を作りました。自分の軸をしっかりと持つと共に、友達の解答やネットの模範解答を読み、徐々に解答をブラッシュアップしていきました。作文は教職課程の先生や国語教員の姉に添削してもらい、何度も書き直しました。試験では、お題は異なるものの、今まで書いてきたものが活かされたので、沢山練習しておいてよかったと思います。

アドバイスとして、自治体によっては大学3年生から(一部)受験することが可能であり、「教師塾」などの研修を受講できれば一次試験免除となる自治体もあります。また、私は数学の免許のみならず情報の免許の取得を行うことで、加点申請を行うことができました。1、2年生の皆さんも早いうちに準備することで優位に進めることができます。

最後に教職課程の先生方やキャリアサポート課の職員方など、ご指導いただきありがとうございました。教員になってからも何事にも努力していこうと思います。

## 公立・中学理科

### システム理工学部 生命科学科 林 奏映

私は2023年に実施された埼玉県教員採用試験(中学校・理科)を一般受験し、合格しました。この場をお借りして、合格までに行っていたことをお伝えしたいと思います。

まず、1次試験は専門教養と教職・一般教養の試験でした。1次試験の対策は3年の10月から始め、年度末にかけて知識の定着を行い、4年に入ってから演習に力を入れました。教職教養は予備校のオンデマンド授業と参考書を活用し、受講直後に参考書に書き込むなど、情報の詰まった参考書をつくりました。専門科目に関しては物化生地の4教科から出題されるため、「広く浅く」を意識しました。最初に中学範囲のワークで基礎の基礎を復習し、物・化・生の対策を高校時代に使用していたワークで対策しました。特に物理は受験で使用しなかったため、友人に協力してもらい理解を深めました。

次に、2次試験です。1日目に個人面接と論作文試験、2日目に実技試験と集団討論が実施されました。論作文は田中友佳子先生やキャリアサポート課の橋本先生に添削していただき、個人面接・集団討論は大学の対策講座のほかに、地元教育委員会の臨採者向け講座で対策しました。2つの対策講座で得られたものは多く、集団討論では既卒者の有無によって、発言の機会や展開に大きな差が出ることを痛感しました。私は議論の流れに遅れないために「キーワード」を聞き逃さないことを意識し、自分

の意見を付け加えて議論を深めるスタイルを確立して本番に臨みました。

今後、採用試験を受験される方へ、自己分析を大切にすることをおすすめします。誰しも得意不得意があり、得意を伸ばすことも、不得意をなくすことも重要です。何が得意で、何が不得意か、どれだけ演習すればどれだけできるようになるのかは一人一人違いがあります。より効果的に・効率的に対策をするのであれば、日々の学習の中で自己分析を継続的にを行い、自身の特徴を明確にして、自分に特化した計画をすることが合格への近道だと思います。

最後に、これまで多くの支援をしていただきました。教職課程の先生、キャリアサポート課の方々感謝申し上げます。これからは教員として子どもたちとともに己を磨き、学び続ける意識で職責を果たしていきます。

## 公立・高校工業

### システム理工学部 機械制御システム学科 津野巧実

私は2023年に埼玉県の高等学校の情報技術(工業)で教員採用試験を受験し、合格することができました。ここでは、私が合格までに取り組んだことをお話しします。

まず最初に取り組んだことは、1次試験の教職教養・専門教養の筆記試験対策です。この二つはどちらも範囲が広く、対策に一番時間がかかりました。さらに私は普通高校出身で工業高校の授業を受けたことが無かったため、専門教養に関しては手探り状態で学習を行いました。加えて、本気で教員一本で考えるようになったのは4年生になってからでした。そのため、少ない時間で点数を稼ぐ効率の良い学習が求められました。そこで、私は二点のことを意識して学習しました。一点目は、教員採用突破講座に積極的に参加することです。講座の中で教職教養のポイントを教えていただけたので、重点な部分を効率よく学習できました。二点目は、たくさん過去問を解くことです。過去問を解いていると出題頻度が多い問題で間違えることがあり、その分野を重点的に学習することで安定して得点できるようになりました。

次に取り組んだことは集団面接、集団討論、個人面接、小論文などの2次試験対策です。特に共通して意識したことは、場数を踏むことです。例えば、キャリアサポート課の方、教員採用突破講座の講師の先生方、ある工業高校の校長先生、家族、友人など様々な人に何度も練習させていただきました。結果的に本番で物怖じせず、自信をもって自分の考えを話すことができました。加えて、学習支援ボランティアの経験があったからこそ、様々な質問に答えられるようになったと思います。実際の教育現場を体験する機会は教育実習と学習支援ボランティアの二回ありましたが、ボランティアの方は学習が苦手な生徒を中心に関わったため、面接で学習が苦手な生徒の指導法を聞かれた際にも経験を基にした自分なりの考えを話せました。

以上合格に至るまでに教職課程の先生方、キャリアサポート課の職員の皆さんをはじめ、多くの先生方に支えられてきました。本当にありがとうございました。これからも日々学び続けながら、生徒とともに成長できるよう努力していきたいと思っています。



2023年12月9日(土)に第10回「教職課程同窓生の集い」を大宮キャンパスとオンラインのハイブリッド形式で行いました。卒業生4名にご登壇いただき「教員としての歩みとこれから一後輩へのアドバイス」と題して座談会を行いました。卒業生18名とOB教員2名、在学生43名にご参加いただきました。

はじめに、教職支援室長の石渡哲哉先生から開会の挨拶があり、次に4名の先生から座談会形式でお話を伺いました。座談会登壇者は、志村創先生(2006年度工学部応用化学科卒・芝浦工業大学附属中学高等学校教諭・理科)、土井麻緒先生(2014年度システム理工学部生命科学科卒・熊谷市立中学校教諭・理科)、長野庸平先生(2004年度工学部材料工学科卒・埼玉県立高等学校教諭・数学)、谷野徹先生(2018年度大学院システム理工学専攻卒・埼玉県立高等学校教諭・数学)です。司会の奥田宏志先生から、教員になった経緯、現在の仕事の様子、困ったときの対処法、休日の過ごし方やリフレッシュ法などを質問いただき、またフロアの在学生からも質問が多く寄せられ、登壇者の先生方が丁寧に答えてくださいました。教員の働き方改革が進められる中で、時間をいかに有効活用し仕事とプライベートを充実させていくか、新しい方法を試しながら日々工夫されている様子などについて伺うことができました。

おわりに、教職課程教員OBの穂坂明德先生より閉会のご挨拶をいただきました。まず、10年目の節目を迎えた同窓生の集いは、教員や教育系企業などで活躍する卒業生に対するアフターケアと、在学生も含めた交流の場を作りたいとの思いから発足され

たことが紹介されました。また、教育現場の変化に関するお話も印象的でした。「学級王国」を作るのではなく、教員とその他の専門職、保護者、地域の人々が連携して問題解決するよう、教員の仕事のあり方が大きく変化したこと、そして教員の多忙化と教員不足が社会的な問題となっていることなど、転換期を迎えているといえます。今回の座談会でもこうした変化に伴って試行錯誤されている様子を伺うことができました。

同窓生の集いの終了後は、イコバ(交流スペース)に移動し、参加者同士の自由な交流の時間となりました。卒業生と在学生の交流も生まれ、参加した学生から「とてもためになりました。来年度から自分も教員になる予定なので、具体的に教員の仕事をイメージすることができました(システム理工学部4年生)」といった感想も届いています。今後も卒業生と在学生の交流の場を設けていきたいと考えています。



## 編集 後記

教職課程だより第48号(2023年度)をお届けします。

今回は、教職支援室長の石渡哲哉先生に巻頭言「日々の教育から感じる言語活動の重要性」をご執筆していただきました。また、就職・キャリア支援部キャリアサポート課の齋藤恵介課長から「教職を目指す上で覚えておいて欲しい言葉」として玉稿を賜りました。

また、田中友佳子先生から12月9日に開催されました「教職課程同窓生の集い」の報告をいただきました。公務繁多の中、誠にありがとうございました。

また、学生からは、介護等体験、教育実習体験、教員採用試験について、

日々の教職の活動について寄稿いただきました。

教職課程だよりは、本学の教職の活動を発信する性格をもつとともに、教職学生の日々の活動への示唆をはかるものであります。併せて、学生の教職課程での学びによって、自己の成長と実現のために役に立てられれば望外の喜びと思います。

最後になりましたが、本紙をお読みいただいた本学の教職員の皆様におかれましては、お気づきのことをお寄せいただくとともに、今後とも教職課程および教職を履修する学生についてご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(工学部 土木工学科 / 教職支援室 牧下英世)